

福井支部ニュース

2025年度 第6号

日本科学者会議福井支部

連絡先: 山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆報告 2025年度 JSA 福井支部第5回幹事会概要 (山根 清志)
- ◆土竜時評 「エリート意識」と「レイシズム」 (土竜 百聞)
- ◆映画評 「ネタニヤフ調書 汚職と戦争」 (小倉 久和)

[報告] 2025年度 JSA 福井支部第5回幹事会の概要

2026年12月5日(月)夕刻、予定より5分遅れの18:05から、オンライン方式で定例の第5回幹事会が開催された。最初に、先頃より体調を崩して調子があまり思わしくないという森透代表幹事から簡単な開会挨拶があった後、山本事務局長の司会で議題順に議事が進められた。

1、山本富士夫先生の「偲ぶ会」の動画配信について

「偲ぶ会」はYouTubeで視聴可能でありそのURLを以下に示す。URLを知る人のみが見得る「限定公開」につき、拡散はご遠慮のこと。(知り合いに知らせることは可)——このような情報伝達がなされた。

2、北陸3県の事務局長会議と北陸地区シンポについて

(1)塚原俊文 JSA 全国幹事(北陸地区選出)とのメールと乾康代氏の報告より
・ハラスメント事案に関する第三者委員会の調査報告書がまとまった。それは22頁からなり、乾康代氏のみ閲覧が許された。この報告書は公開されない。

・要は、ハラスメントが認定された、こと。
・松田正久全国代表幹事から、JSAでハラスメントを起こしたことにつき代表者として、乾康代氏に対して直接対面で謝罪があったが、加害当事者からの謝罪はなかった。よって乾康代氏は、同者に真摯な謝罪と、編集委員会による謝罪および、今後ハラスメントを起こさない計画づくりが必要であることを求めた。

・乾康代氏から、「小さな一区切りがついたと思います」とのコメントあり。
・塚原俊文 JSA 全国幹事からは、上記の内容について、今後の全国幹事会で報告の予定であるとの報告あり。——以上のような情報伝達が行われた。

(2)北陸地区シンポについて(奥川富山支部事務局長の報告等より)

①主催、②メインテーマ、③趣旨、④開催日(案)、⑥開催形式に関しては既に報告済み。⑤プログラム(案1)or(案2)の特別講演または基調講演の講演者がフリージャーナリスト・杉本裕明氏[演題未定]に決定。一般講演では、Ⅰ. 富山支部: 奥川光治氏「庄川水源地の産廃処分場計画について」決定、Ⅱ. 石川支部: 未定(すでに固まっている様子という)、Ⅲ. 福井支部: 未定(全く決まっていない)。

⑦今後の日程としては、

- ・一般講演者の支部からの推薦…12月中、演題と要旨(200字程度)
- ・予定稿原稿締切り…3月末。
- ・北陸3県の事務局長会議の開催は未定である。

なお、当日、福井支部の一般講演者を誰にするかを議論したが、結局は、まとまった結論を得るにいたらなかった。

3、2026年度 JSA 助成研究の募集について

募集についての案内があった。詳細はJSAの会員専用ページ(HP)に記載とのこと。

4、JJS の電子ジャーナルの利用に関するアンケートについて

アンケートは 12 月末で締め切られた。

2026 年度は冊子(紙媒体)で作成される。大会・全国幹事会での報告のとなり、2026 年度は全会員に冊子体の『日本の科学者』を届ける。その後、電子ジャーナルをどのように導入するか、冊子体の作成数をどうするかは、アンケート結果をもとに全国事務局で議論して方針を示し、最終的には次期大会で決めることになる——とのこと。

5、JSA60 周年記念シンポジウム祝賀会について

2026 年 2 月 22 日(日) 18:00~20:00 茗溪館中ホール

参加費：1 万円、定員 70 名

6、例会について……積み残しなどの例会の具体化

その中の「学問の自由」と「大学の自治」の件につき、JJS2025《特集学問の自由と揺らぐ基盤》所掲の各論文、JJS2026【60 周年記念号】竹内智「時代の趨勢を読み解き未来へつなぐ」等を参考に、福井支部内で学習会(例会)ができないか。時期は 3 月末頃をメドとするということになった。

7、「2・11 集会」について

山根担当幹事より、日時：2 月 11 日(水) 午後 2 時 30 分~4 時 30 分、場所：県教育センター 4 階大ホール、講師：平井美津子氏(演題未定)、JSA 福井支部としての分担金は例年どおり 3,000 円である——との報告あり。

8、『福井の科学者』について

高木担当幹事ならびに編集委員のご尽力により、2025 年 12 月号(14 号)が発行された。

小野一幹事より寄せられた原稿「「能登研」活動を終えるにあたって」は、『福井の科学者』に特集で使わせてもらおうという結論になった。

9、支部ニュースについて

担当幹事の欠席もあり、スルーした。

10、会員拡大と会計について

伊藤勇担当幹事より、以下の 2 点の報告があった。

- ・11 月 14 日、12 月会費を前納したこと、12 月で 1 名の一般会員の退会(高齢のため)があったこと。
- ・12 月 12 日、1 月会費が前納されたこと。

11、その他(イベント紹介)は省略

最後に森代表幹事の閉会の挨拶があり、併せて次回が 3 月 2 日(月) 18 時からと確認した。終了は 19 時 57 分、出席幹事は 6 名であった。

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

- ◆ジャーナル評論：「日本の科学者」「福井の科学者」の評論
 - ◆時事評論・批評、意見・見解、訴え、広報など
 - ◆活動・経験報告、事例紹介、行事案内、会員への案内・お知らせ
- その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。 yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp
ogura@u-fukui.ac.jp

2026 年前期の会費納入をお願いします

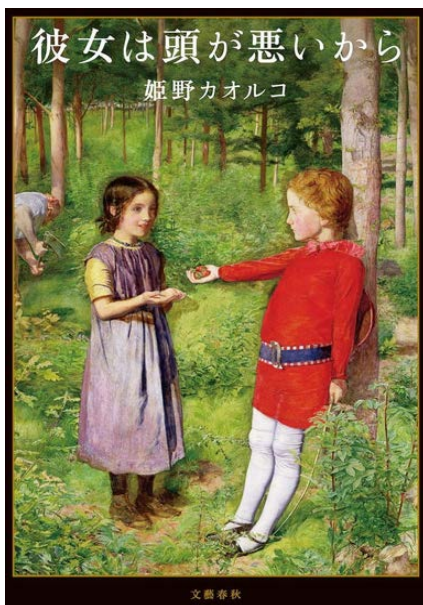
2026 年前期の会費納入をお願いします。また、過去の未納会費のある方は、分納でも構いませんので、至急納入をお願いします。

〔土竜時評〕「エリート意識」と「レイシズム」

杉本県知事のセクハラとトランプのベネズエラ武力攻撃 報道からみるジャーナリズム時評（その9）

福井県知事杉本達治氏の任期途中の「辞任」にともない、知事選が告示された。第三者委員会の特別調査委員会による報告では、多数の女性県職員に対する「セクハラ」が確認された。調査に応じた10人ほどの女性職員に送った1000通ものメールが公表された。大部の報告書は読むのが大変であるが、被害者が上司に相談してもあしらわれ、6000万円もの退職金を要求通り支給するなど、問題の根っこは県幹部組織内に深く広がっている。しかも、杉本氏は自治省からの出向で20年以上前から福井県の総務部長や副知事を務めたが、似たような問題行動をしていたとか。

何十年も前から似たような話が非常に多い。SNSが発達してからは「セカンドレイプ」も爆発している。兵庫県知事の斎藤元彦知事は「パワハラ」だったが、「2馬力選挙」も登場して被害者を追い込んで「再選」を果たす。高級官僚だけでなく社会的地位や経済的地位の高い者や「上級国民」、さらにはSNSによる「上から目線」のセカンドハラスメントだ。



20年以上前にTVで現役政治家が「集団レイプをする人は、まだ元気があっていいんじゃないですかね。まだ正常に近い」などと発言して批判を浴びた。社会的に「下位」な層への「上から目線」「エリート意識」の「ハラスメント」は長い歴史がある。10年ほど前の現役東大学生の女子学生セクハラ事件を題材にした姫野カオルコの「彼女は頭が悪いから」¹⁾を読んだとき、非常に胸糞悪かったのを思いだす。裸にして遊んであげたが犯したりはしなかった、と。杉本達治氏の言い訳と同根ではないか。

新年早々米軍はトランプ大統領の指示で反米ベネズエラを武力攻撃し大統領夫妻を「拉致」、マチャド氏からノーベル平和賞メダルを「譲られ」た。攻撃の名目は麻薬だったが本音は石油だった。ニューヨーク・タイムズの国際法違反ではないかとの取材に、「ドンロー主義」を標榜し「国際法は必要ない」「私の道徳が規準だ」などと放言した。就任早々のDOGEから始まって今ではICEが「暴力的」な装置となり米国各地で「私の道徳」を実践している。そして、イランを親米「パーレビ国王」時代に戻す、グリーンランドを「領有」する、などと連日発信している。これらのニュースは福井新聞でも報道されているが非常に「客観的」「傍観的」であり、評者は、「事実」だろうが「報道」とは言い難い、という気がする。

中條献著「アメリカ史とレイシズム」²⁾は、評者の若年時代からの長年の疑問を氷解させてくれた。その疑問は、米国は世界の「民主主義」を代表する国であるのになぜ黒人差別が常態化しているか、だった。黒人公民権運動のキング牧師が暗殺され、評者もファンだったボクシングのカシアス・クレイ（改名後モハメド・アリ）がベトナム戦争への徴兵拒否で有罪判決をうけライセンスはく奪、などというニュースを見て疑問を持ったが、それ以上の関心はなかった。むしろ、学生時代は米国留学を夢に描いていたのだった。「人種」という概念がどう形作られ形式化されていったか、当初は白人・黒人と先住民という大雑把な区分が、その後黒人との混血区分が精緻化され、先住民の扱いや他国からの移民、彼らとの混血、などの法的位置づけが形作られていった、という。ヨーロッパ伝来の「優等・劣等」人種概念がどのように精緻化されていったか、トランプ流「ドンロー主義」概念形成の経緯がよく判る気がする。トランプ氏が創出したものではなく、建国以来の、ヨーロッパの植民地時代の、それ以前からの、思考概念だ。普通に使う「自由」



「平等」「人権」などの「言葉」自身は古くからあるが、現今の基本概念としてはわずか二百年余りの歴史で、DEIとかSDGs等はいずれ最近だ。

「劣等民族」「上級国民」などの差別言葉は、「平等」などの概念と拮抗しながら「健在」で再生産されている。世界が「レイシズム」や「シオニズム」がもつ「選民」意識などと対抗するには、まだまだ長い時間が必要か。

(土竜 百聞)

- 1)『彼女は頭が悪いから』姫野カオルコ著、文藝春秋 2018/7/20
- 2)『アメリカ史とレイシズム』中條献、岩波新書 2025/10/17

【映画評】「ネタニヤフ調書 汚職と戦争」(The Bibi Files)

この映画は2024年に公開されたが、イスラエルでは上映禁止、米国でも劇場公開が規制された話題の映画である。日本では昨年11月から全国で公開上映され、福井でも師走に入ってメトロ会館で上映され、筆者も観に行った。原題の「Bibi」はベンヤミン・ネタニヤフ(Benjamin Netanyahu)氏のファーストネームの愛称で、国内外で普通に使われており、映画の中でも「ビビ」と呼ばれていた。

ネタニヤフ氏は、かなり以前からいくつもの汚職疑惑で起訴されており、それを回避するためにガザ戦争を継続していると言われている。映画で紹介されていた彼の今の妻、サラ氏、が強硬派で、彼の汚職の「黒幕」的役割を果し、自身の贈収賄疑惑もあり、捜査が進まないようガザ侵攻にも「尽力」しているとか。先日、トランプ氏がイスラエル大統領にネタニヤフ氏の「恩赦」を要求し、彼自身も「恩赦」を申請した。今のところ、まだ判決が出ていないから「恩赦」はできないとか。

この映画には非常に衝撃を受けた。夫妻の汚職疑惑を取り調べているのがイスラエル司法・警察で、その実際の取調室のカメラによる映像が、この映画中に度々あらわれる。衝撃を受けたのは、この、ネタニヤフ氏の汚職疑惑に対する警察の取り調べの様子だ。はぐらかすネタニヤフ氏に、丁寧に迫っていく様子が分かる。ガザ戦争中でなければ、もっと丁寧に追求できるのかもしれない。良心的(左派的?)イスラエル人が多く国を離れ右派政党・団体が闊歩する中(筆者にはそのように感じられる)、司法捜査の先端を担う



警察組織がこのような取調べの態度を示しているのが驚きだったのだ。翻って日本では、特に政治事案では、与党政治家の買収まがいの贈収賄行動や統一教会との癒着を警察に訴えても、多くの場合不受理や不起訴になる。例えば裏金問題では「3000万円以下は不起訴あるいは執行猶予」などと報道され、その後は捜査も報道も特にはなく、起訴を免れた議員・政治家が大手を振って闊歩している。これは、イスラエルの司法が「優れている」の?

(小倉 久和)

参考: <https://www.yomiuri.co.jp/culture/cinema/20251113-OYT1T50163/>

【映画評】「ネタニヤフ調書 汚職と戦争」

...リークされた取り調べ映像を駆使して描くイスラエル首相の肖像

<<編集後記>>

2025年度支部ニュース第6号をお届けします。

高市政権が「働き方改革」を訴え、80%の高支持率を背景に就任初の国会の冒頭で解散宣言しましたが、これを斎藤幸平氏は「**働く前解散**」と名付けました。株式市場は就任後一時盛り上がりましたが、円安・物価高基調はそのまま悪化の兆しすらあります。鈴木宣弘氏の『世界で最初に飢えるのは日本』(岩波新書)がよいよ現実には?

(OG.)